

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授

弥生時代の土器に花の絵を描いたものがどうしてないのか、だいふ前から気になっていた。まさか花がなかったわけでもあるまい。動物の絵はいっぱい描かれているので、生物の絵がないというでもない。

親しくお付き合いして頂いた故佐原真さん(考古学)にも聞いてみたが、結局明確なお答え

はなかった。きつとこの疑問は棺桶にまで持ち込むことになるのだろうと思っていたところ、先日ふとしたことからそのヒントを手にすることができた。

それは「染織」を長い間やってこられた志村ふくみ・洋子さん親子との鼎談(ていだん)の場のことだった。志村ふくみさんの随筆にはだいふ前から強い関心をもっていた。柔らかな

花を描かなかった弥生人

文体の中にも色や自然に対する鋭い視線が感じられ、何冊かの随筆集がいつのまにか愛読書のひとつになっていた。いつか直接お目にかかってお話を伺うことができないかと考えていたのですが、鼎談の機会が与えられたとき、まさに願いがかなった思いがした。

藍染めの実演を拝見しながらじかに伺うお話には真にせまる

失われた「生命を見る力」

むろん現代にも、美しい花の

絵を描き出した

迫力があつた。何色とも表現しがたい複雑な色あい。空気に触れることで刻一刻変わる色模様。藍色に染め上った絹糸は、その日の青空のように深く、美

解できたように思えた。何かがずとんと落ちたような気がした。そうなのか。花とは、命の最終形なのか。

しかなかった。志村さんがボツリと言われた。「緑色は染められないのです」。緑の色は、クチナシなどで黄色く染めた糸に、あとから藍を施すのだと聞かされた時の驚き。植物で染めるのに、

桜の枝は、将来その枝につくであろう花の色を内に秘めている。草木で染めるとはまだ花をつけられない枝葉に秘められたいのちをもらって染めることなの

だ。染めるとは、その未来の色を頂くこと、つまりはそのいのちを頂くことなのだ。想像をたくましくして考えるに、弥生時代の人びとはすでにこのことを知っていたのではな

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。

執筆者略歴